

礼拝のしおり (2022年5月号)

～主の御前に一つにされて～

幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。
(コリントの信徒への手紙一 13章 11～12節)



園庭の藤棚が紫色に染まりました。(4月中旬)

主の聖名を讃美いたします。新型コロナウイルスの世界的な流行がいつ収束するのか分からぬままに3年目の時を過ごしています。さらには、ウクライナの地で起こっていることが今後の世界をどのように変えていくのか、私たちの心に大きな不安と心配をもたらしています。神さまが力強い御手をもってこの世界を正しい方向へとお導きくださるよう、ただひたすらに祈りつつ、一人ひとりに与えられた日々の務めに励むことしかできない私たちであることを痛感させられます。

私は、高井戸教会の附属幼稚園である角笛幼稚園において、園児である幼い子どもたちの姿に身近に接する機会を与えられています。その中で、いろいろなことに気づかされ、また考えさせられることが多くあります。

子どもたちは、園庭にあるさまざまなものを発見し、私にも教えてくれます。「園長先生、あそこに小さなきのこを見つけたよ!」。それ以外にも、いろいろな場所にダンゴムシを見つけたり、蟻たちが集まって何かを運んでいる様子を興味深く見ていたりする子どもたちの姿を何気なく眺めていて、気づかされたことがあります。それは、小さな子どもたちは、目の位置が大人である者たちよりもはるかに地面に近いということです。子どもたちには地面で起こっていることが、大人である者よりも身近によく見えるのでしょうか。それに、強い好奇心が加わります。子どもの目線に合わせると見えてくるものがある。そのことに気づかされます。

ただ、大人である私たちは、逆に子どもたちよりも高い目線で、より遠くを見ることができるといえるでしょう。しかし、実際は、遠くを見るよりも、さまざまなことに汲々として、何かに心奪われて歩むことが多い。自分のこととしてそう思います。

もちろん、遠くを見ようとしても、私たちが見ることには限界があります。見えないものを見る、信仰の眼差しにおいてもそうです。私たちが生きるこの世界の真実を、神さまがこの世界にどのように関わっておられるのかということ、**「今は、鏡におぼろに映った」**形では見ることができない。地上に生きる限り、常に**「今は一部しか知らな」**い者として歩むほかはないのです。

しかし、大切なことは、パウロが語るとおり、今は鏡におぼろに映ったものしか見ることはできず、今は一部しか知らなくとも、やがて終わりの日には、はっきりと知るようになる。知る者とさせていただけ。そのことを知っているということです。

さらに、パウロはこう語っています。「そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる」。「はっきり知られているように」。近くのこと、遠くのこと、はっきりとは見えないままに、この世界にあって日々を生きる私たち一人ひとりを、神さまははっきりと知っておられる。私たち自身は、神さまによって**「はっきりと知られている」**存在です。神の愛の眼差しが、見えないところから、今日も私たちに向けられているのです。

◎5月15日～6月12日の主日礼拝の予定

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21
5月15日(日)	創世記 3章 8～9節 マタイによる福音書 26章 69～75節 「外に出て、激しく泣いた」	詩編 32編	210, 51, 197, 28
5月22日(日)	ゼカリヤ書 11章 12～13節 マタイによる福音書 27章 1～10節 「後悔の思いに満たされる時にも」	詩編 6編	472, 300, 432, 29
5月29日(日)	イザヤ書 53章 11～12節 マタイによる福音書 27章 11～26節 「裁かれる主イエス」	詩編 62編	527, 474, 513, 28
6月5日(日) ペンテコステ礼拝	創世記 6章 5～6節 エフェソの信徒への手紙 4章 25～32節 「神の聖霊を悲しませるな」	詩編 51編	346, 342, 81, 26
6月12日(日)	サムエル記下 16章 5～14節 マタイによる福音書 27章 27～44節 「十字架の王を仰いで」	詩編 33編	2, 299, 516, 27

☆5月15日～6月12日の主日礼拝、その他について（お読みください）

新型コロナウイルスの感染防止を考慮して、5月15日以降の高井戸教会の主日礼拝等について、以下にご案内いたします。ただし、感染状況が変わり次第、以下と違う対応になる可能性があります。その点をご了承ください。なお、変更する場合は、高井戸教会の週報やホームページでお伝えするようにいたします。

◎主日礼拝について

主日の礼拝については、毎週日曜日、第一礼拝(午前9時30分開始)と第二礼拝(午前11時開始)という2回の礼拝を行う形を継続しています。どうぞ、どなたでも第一礼拝または第二礼拝にご出席ください。ただ、感染に不安のある方、体調の優れない方は無理をなさらず、ご自宅で礼拝をお捧げください。

毎月第1日曜日の第一礼拝ならびに第二礼拝において、聖餐式を行います(安全を期して、市販の聖餐用の個包装のウエハースとぶどう液を用います)。

毎主日の第二礼拝のライブ配信(礼拝の生中継)も続けて行っていますので、ご自宅において動画を視聴しながら礼拝を捧げることができます。ライブ配信を視聴したい方は、高井戸教会までご連絡ください(TEL 03-3333-2465)。

なお、礼拝説教の動画のアップロード、『礼拝のしおり』の発行も続けています。どうぞご利用ください。

◎子どもの教会について

幼小科は、毎日曜日午前8時30分より、礼拝堂において礼拝を捧げています。ただし、分級は行いません。

中高科は、毎日曜日午前9時30分より高井戸教会2階会議室において行っています。

◎オンライン祈禱会について

Zoomというアプリを用いてのオンライン祈禱会を、毎月1回(第1日曜日の午後5時より)行っています。

今現在、礼拝のライブ配信ならびに説教動画のメールを毎週受け取っておられる方は、開催日の前日までに案内のメールをお送りしますが、それ以外の方で参加を希望される方は、七條牧師までご連絡ください。また、「オンライン祈禱会」と称していますが、高井戸教会にいらしての参加も可能です。互いに距離を保ち、換気をした部屋で、マスクを着けた形で参加していただきます。準備の関係上、教会にいらっしゃる方は事前に七條牧師までご連絡ください。

「復活の主との出会いの朝に」（ヨハネ福音書 21 章 1～14 節） 牧師 七條真明

「イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。」十字架に死なれ、墓に葬られた主イエスが、およみがえりになった後、復活の主イエスが、弟子たちの前に姿を現わしてくださった三度目の出来事を、ヨハネ福音書はその第 21 章において記しています。ペトロが「わたしは漁に行く」と言ったので、ペトロを含め 7 人の弟子たちが、ティベリアス湖に舟を出し、夜通しの漁を行ったのでした。「しかし、その夜は何もとれなかった」。夜通しの漁は、魚が一匹も獲れないまま、空しく終わったのでした。

しかし、弟子たちが空しく漁を終えたその湖の岸边に、復活の主が立っておられました。ただ、岸边に立っておられるのが、主イエスその御方だと弟子たちには分かりませんでした。弟子たちは、主イエスが立っておられた岸边からそれほど離れた距離にいた訳ではありませんでした。湖の水面を朝もやが覆っていたからでしょうか。それとも、夜通しの漁が徒労に終わったとの思い、その空しさが弟子たちの心を覆っていて、自分たちのほんの近くに、主イエスがおられるなどということに思いも及ばなかったということなのでしょう。

その時の弟子たちにとって、岸边に立つ何者かが「子たちよ、何か食べる物があるか」と舟の上の弟子たちに問いかけます。弟子たちが率直に「ありません」と答えると、岸边に立つその人が、「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」と言います。弟子たちは空しい思いの中で、しかし、最後の力を振り絞って、言われたとおりに網を打ちます。すると、どうしたことか、夜通し漁をして徒労に終わったはずのその場所で、信じられないほど多くの魚が網にかかった。魚があまりに多くて、もはや網を引き上げることができなかつた。それほど魚が網にかかったのです。

その時に、岸边に立って、「舟の右側に網を打ちなさい」と言ったのが誰であるか分かった弟子がいました。その弟子がペトロに『主だ』と言ったのです。それを聞いて、ペトロは湖に飛び込み、主イエスが立っておられる岸边へと泳いでいきました。ほかの弟子たちは、たくさんの魚がかかった網を引き上げることができず、魚を入れた網が水につかたまま引くようにしながら、舟を岸へと漕いでいったのでしょう。そうして、ペトロもほかの弟子たちも漸く岸について、水から上がってみると、岸には炭火が起こしてありました。そしてパンも用意されていた。主イエスが、炭火の前で、魚をひっくり返したりしながら、焼いておられたのでしょうか。何ともユーモラスな光景でもあります。そうやって主イエスが夜通しの漁で疲れた弟子たちに食事を用意してくださっていた。そして、ここで、主イエスの深い配慮を感じさせられるのは、魚はもうあるからいい、とはおっしゃらなかったことです。「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われました。網にかかった大量の魚。弟子たちが獲ったと言っても、それも主イエスの御言葉に従って獲った、ただ主からの恵みによってそれらすべても与えられた魚だと言えませぬけれども、あなたがたが獲って来た魚も何匹か持ってきなさい、と主は言われた。それも焼いて一緒に食べようと言われたのでしょう。主イエスは、主の恵みの中でなされる私たちの働きと労苦を無視なさる御方ではないのです。

主イエスが弟子たちのために食事を用意してくださっていた。復活の主イエスとの朝の食事。この湖の岸边での食事は、弟子たちにとって決して忘れることができないものとなったに違いありません。主イエスが一緒にいてくださる食卓。食事というのは、毎日私たちがしていることです。食事は、私たちが生きる時、私たちの日常生活を最も代表するものとも言えるでしょう。弟子たちは、復活の主とお会いした一回目、二回目の出来事と共に、この三回目の出来事もまた、深く心に留め続けたことだろうと思うのです。一回だけのことではない。特別な時だけになどではない。食事の時、そしてそれが表す日々、一日一日、いつもどんな時も、主イエスが一緒に食事をしてくださるように、共にいてくださる。そのことを信じる。信じて生きていく。この三回目の出来事によって、弟子たちは、日々信じて生きていくことを知ったのではなかったでしょうか。

そしてまた、この聖書の箇所を読む時、いつも思われることがあります。それは、主イエスが一体いつから岸边に立っておられたのだろうか、ということ。もしかすると、夜通し労苦する弟子たちをご覧になって、早くから、彼らのために食事の備えをしてくださっていたのではなかったか。弟子たちが労苦した夜の時も、弟子たちが空しい心を抱えて迎えた朝も、岸边にキリストは立っておられた。弟子たちが気づかないところでも、弟子たちが知らないところでも、主イエスは、弟子たちのそばにいてくださって、弟子たちを見つめ、弟子たちの食事を準備してくださっておられたのだと思うのです。

「イエスは、『さあ、来て、朝の食事をしない』と言われた。弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と問いただそうとはしなかつた。主であることを知っていたからである」。主イエスが、自分たちの喜びも悲しみも、辛いこともこの世で味わう空しさもすべて知っていてくださる。そのことを知り、信じて生きるために、復活の主イエスが三度、自分たちのもとに現れてくださった。弟子たちは、そのことをきくと心のうちに刻んだに違いありません。